

今回は、「幸せは急がないで」より「美しい人と卑しい人の違い」を紹介します

顔というものは、とても不思議なものです。顔の造作もよく整い、本人も自分の器量に自信があり、ふだんのお手入れも怠りなくしている。それでいて少しくも美しくなく、むしろ嫌悪感さえ与えるという顔もあります。逆に、顔だちはそれほどの美人ではなく、ときには化粧では隠しきれないほどの痣（あざ）があるけれど、何かひかれる美しさに思わず振り返りたくなるような明るさや温かさをたたえた顔があります。実は、そういう素敵な顔と出会うたびに思い出す詩があるのです。

女（おみな）あり二人ゆく若きうるわし老いたるはなほうるわし

白髪がなくて美しいというわけではない。シワがなくて美しいというのでもない。白髪の本一本に、シワのひと筋ひと筋に、40年50年の歳月を生きてきたその人の生きざまが輝いて、美しいのです。明治の女流歌人・与謝野晶子の生まれつきの器量は、あまり恵まれていなかったそうです。それが晩年の晶子は、ほれぼれするほどに美しかったと言います。堺の旧家のお嬢さまとして育った晶子が、与謝野鉄幹を慕って家出。たくさんの子供をかかえ、貧困にあえぎながら夫の鉄幹を励まし、歌や文学の道を生き抜いた厳しい生きざまが晩年の晶子を、いぶし銀のような美しさに磨きあげたのでしょうか。

「40歳になったら自分の顔に責任を持つ」といったのはアメリカ大統領のリンカーン

私も人格は行為の集積であり、自らの毎日の行為によって彫り上げていくもののような気がします。親からいただいた顔や体を素材として物心つくその日から何を思い、何を語り何をしたか、言葉には表さない心の深層に秘めたわずかな思いまでも、そして誰も見ていないところでのささやかな行為までもが、一分（いちぶ）のごまかしもない彫刻刀となって私やあなたの顔や姿を彫り、人格をつくりあげ衣装や化粧ではごまかしきれない美醜の差となって顔にあらわれるのが40歳代ではないでしょうか。会津八一（あいづやいち・歌人）先生は知人にこんな手紙を書き送っておられます。

「気をつけて、落ちついて美しき人になりたく候（そうろう）」

私自身も、美しい人になりたいと心から思います。

「20歳の顔は自然の贈り物。50歳の顔はあなたの功績」（ココ・シャネル）

男性も女性もその人の長年の生きざまが顔にでる。卑しい言動や卑怯なことばかりしてきた人は、卑しい顔になる。自分のことより先に、人の喜びや人の幸せを考えて生きてきた人は、美しい人になる。何の努力も苦労もせず、もって生まれたスタイルや美貌だけをたよりに生きてきた人は晩年になって深みのないのっぺらぼうの味のない顔になる。

「物心つくその日から何を思い 何を語り、何をしたか」

Q1：顔の美しい人と卑しい人の違いは何ですか？

A1：（ ）

Q2：あなたは、美しい人と卑しい人の違いをどこに感じますか？

A2：（ ）